

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年6月6日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21520016

研究課題名（和文）ニヒリズムの超克—ベルクソニズムによるハイデガー哲学の脱構築を通じて—

研究課題名（英文）Toward the Overcoming of Nihilism —A Deconstructive Interpretation of Heidegger's Philosophy by the Reintroduction of Bergsonian Views of Life

研究代表者

古荘真敬（FURUSHO Masataka）

東京大学・大学院総合文化研究科・准教授

研究者番号：20346571

研究成果の概要（和文）：本研究において、われわれは、「私が自己の生に気づいてあること」のもつ時間的構造についてさまざまに考察しつつ、ハイデガーの「現存在」概念の問題性をベルクソニ的な「持続」概念との連関において解明することを試みた。その結果、ハイデガーのいう「実存の重荷性格」を「生の“外来”性」として新たに捉え返すことを通じて、生の時間的自己理解のうちに避けがたく萌すニヒリズムを超克するための思索を準備することができた。

研究成果の概要（英文）：In this research we have variously tried to understand the temporal structures of “our being aware of our own life,” where we can find the central question about the connection between Heidegger's concept of “Dasein” and the Bergsonian “Pure Duration.” The most important achievement was that we found a way to reinterpret the so-called “burdensome character of existence (Lastcharakter des Daseins)” as “advent-character of life.” Through deliberating on this concept, we prepared to answer the question why a sort of nihilism is almost inevitable for our temporal self-understanding of life and how we can possibly overcome it.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	100,000	30,000	130,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
2011年度	100,000	30,000	130,000
総計	700,000	210,000	910,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学、哲学・倫理学

キーワード：哲学原論・各論、倫理学原論、ハイデガー研究、ニヒリズム、生の哲学

1. 研究開始当初の背景

研究代表者の古荘は、既発表の論文「共同体の没根拠と存在の変容—ハイデガーの共同体論の帰趨—」（2007年）や論文「共同体という底無し没根拠—「別の始元への移行」の倫理的含意—」（2006年）等の研究に

おいて、1930年代中葉のハイデガーによる存在論的な「共同体」論の意義を、『人間の条件』におけるハンナ・アーレントの「公共性」論と比較対照することによって明らかにすることを試みていた。それによれば、アーレントの「公共性」論の眼目は、「過ぎ去る

時」の地平における人間的生の自己理解のうちに萌す「ニヒリズム」との対決のうちにあると考えられるが、古荘の解釈では、アーレントが、そうした「ニヒリズム」からの救済の道を、肉体的実存の「固有性」の次元を止揚する「公共性」の次元の復興のうちに見出そうとしていたのとは対照的に、ハイデガーの「共同体」論は、「固有なもの（各自的なもの）」vs.「公共的なもの（共同体的なもの）」という対立の構図を流動化させつつ、「固有性」の没根拠的な根底 (**abgründiger Grund**)のうちにこそ「私たち」を媒介する最深の紐帯が見出される」と直観する着想を蔵している。上記の諸論考において古荘は、この着想のうちに、件の「ニヒリズム」を原理的に克服するためのヒントを発掘しようと試みはじめていたのだった。しかしながら、考察の途上において徐々に自覚されてきたのは、ここで本来思索されるべき「固有性」の次元の没根拠的な根底」とは、実のところ、ハイデガー自身の強調した「現存在の最も固有な可能性」としての「死」のうちではなく、むしろ「生命」の境域のうちにこそ見出されるのではないか、ということであった。ニーチェとの対決という課題のもとに展開されたハイデガー自身の「ニヒリズム」論も、究極的には、この「生命」という、「存在するものとしての存在するもの」という同一者の彼岸に生成するものを如何に思考するか、という課題に帰着するであろうと考えられた。さらにまた、古荘は、旧論「「理由の空間」と哲学の問い」(2004年)において既に、行為の「理由」を与えあう規範的な人倫の空間を超えた「自然の没理由性」をめぐる後期ハイデガーの思索の意義に関する若干の考察を試行していたが、如上の「生命」の境域に関する論考は、カント的な理性主義とは別の仕方による「人倫の形而上学の基礎づけ」を含意するものであろうとも予感されていた。

だが、「存在するものとしての存在するもの」という同一者の彼岸に生成する「生命」の境域を思索する、という課題を仕上げるためには、古荘は、もはやハイデガーの思索圏内に安閑と留まっているわけにはいかないであろうとも思われた。そこで古荘は、この窮状を打開する方途を、ベルクソンの生命哲学の視角からハイデガー哲学を「脱構築」する試みのうちに探索することを求めて、「ベルクソニズムによるハイデガー哲学の脱構築」を企図する本研究に着手したのだった。ベルクソンは、「生命」と「時間」の問題について最も深く思索した先駆者の一人であるばかりでなく、アリストテレスと並んで、初期ハイデガーが自らの哲学体系を構想するにあたって最も真剣に参照した哲学者の一人であったと思われ、さらには、古荘が

当時最も重視していた M.アンリによるハイデガー批判の意義について考え直すためにも、極めて重要な参照項であろうと考えられた。

2. 研究の目的

「國破れて山河在り／城春にして草木深し／時に感じては花にも涙を濺ぎ／別れを恨んでは鳥にも心を驚かす」(杜甫)、「夏草や兵どもが夢の跡」(芭蕉)等と、古来歌われてもきたように、“人間的な意味の秩序と自然の秩序との落差”の認識をともなってしばしば切実に感受される「時の過ぎ去り」の経験は、われわれ各人の胸底に、「生命の虚しさ(**futility of life**)」(アーレント)をめぐる哀切の念を結晶させがちであるように思われる。流れることをやめない時の地平のなかで、人倫的な規範を含むさまざまな人間的秩序の根拠や意味は一体何処に見出されるのか、或いはそもそも「この私」が、何ごとか良き知らせを待ちながら日々生きながらえてあること自体の意味は何処に見出されるのか。忍びよる「ニヒリズム」の意識において胚胎される、そうした問いをめぐるわれわれの思索が、究極のところでは決着をつけなければならないのは、「過ぎ去る時」という人間的生の自己理解の地平それ自身の意味への問いである。

本研究の目的は、こうした問題関心のもと、われわれ各人の生の時間的な自己理解から殆ど不可避的に生じる「ニヒリズム」の構造を明らかにし、そのニヒリズムの超克(あるいは救済)のための理路を原理的に解明することによって、道徳形而上学の基礎を見出すことである。前記の「1. 研究開始当初の背景」において述べたように、研究代表者の古荘は、この課題を、元来ハイデガーとアーレントの比較研究を通じて見出すに至ったが、そこでの考察をさらに事象に即して掘り下げ展開するため、本研究においては、「存在するものとしての存在するもの」という根源的同一者の次元をめぐるハイデガーの存在論的思索の核心を、ベルクソンの生命哲学の視角から批判的に再検討し、脱構築することを企図することにした。

3. 研究の方法

上述の研究目的を達成するため、本研究では、まずはベルクソンとハイデガーのテキストを徹底的に読み込み、その読解を通じて得られた「時間の経験」「生命と自己」「感情と記憶」「現実性と可能性」といった鍵概念めぐる新しい着想にもとづいて、斬新な視角から、ハイデガーのテキストを哲学的に批判すること、ないしは彼が思索すべきであった事柄の核心を独自に概念化することを試みていく。また、得られた研究成果は、順次、雑

誌論文、学会発表、図書等において公表して、国内外の研究者からの批判を請い、彼／彼女たちとの活発な議論および意見交換の機会を通じて、考察視点と表現をさらに研ぎ澄ませていくことを試みていく。

4. 研究成果

前述のような学術的背景にもとづく課題設定において取り組まれた、各年度の研究において得られた成果について、以下、具体的に記すことにしたい。

まず2009年度の研究では、本研究全体を主導する基礎的考察の視点をいっそう確かなものにするを狙って、「時間を経験する」という事柄それ自体がもつ自己再帰的な構造について、フッサールの時間論、およびハイデガーの「自己触発」論を参考にしつつ、原理的に考察することが、まず試みられた。「時間を経験する(erfahren)」ことは本質的に「時間を蒙る(erleiden)」ことであり、「経験する主体自らが時間的変化を蒙ることなしには、世界の時間的推移をただ観察することなどできない」ということは、通常、われわれにとってごく自然で自明とさえいえる事実である。しかし、世界の内に存在する身体的および心理学的な自我から、世界を構成する超越論的主観性を区別しようとする従来の超越論的哲学によっては、この自然的な事実が、いったい何を意味しているのかを十全に理解することができない。そこで、この年の研究では、「時間を構成すること」と「時間的に（構成的主観自身が）構成されること」との本質的並行性に着目するフッサールの時間論と同様の発想を、超越論的哲学の構図を解体しようとするハイデガー哲学のうちに発掘しつつ、こうした事柄のもつ意味をベルクソンの「純粹持続」概念との連関において理解し直すことが試みられた。

つぎに2010年度の研究においては、「時間を蒙ること」としての「時間経験」について考察した前年度の研究成果を踏まえつつ、ハイデガーの『存在と時間』における現存在の分析論を独自の観点から批判的に再吟味し、過ぎ去る時間の地平におけるわれわれの生の自己理解の構造を、より詳細かつ具体的に、現象学的・解釈学的に分析することが試みられた。その成果が、下記の「5. 主な発表論文等」の〔図書〕欄に挙げた論考である。ここでは（当論考自身において完結すべき構成と文脈を鑑みて、必ずしもそのように明示的に言及したわけではないが、内実としては）ハイデガーの分析した「良心の呼び声」という現象の実質をなす事柄として、われわれの

「(自己)意識」と「生命」とのあいだに必然的に生じる、ある種の〈亀裂〉を見てとることが試みられ、この〈亀裂〉に対してわれわれ各自がどのような態度をとりうるかという問題のうちに、ありうべき道徳哲学の原理的な基盤が垣間見られることとなった。だがこの論考は、いまだ問題の「解決」といった類のものではなく、むしろ、新たな「生の現象学」の問題設定のための端緒にすぎないことが同時に自覚された。われわれがさらに探究しなければならないのは、「(私は)この生を現に生きていながら(自分が)この生を現に生きていることを知っている」という「生命の自証」あるいは「自己覚触」とでも呼ばれるべき事態は一体どのような時間的構造を有しているのかという問題であることが認識された。

なおまた、上記研究の遂行に資するため、フライブルクおよびベルリンの研究機関を訪問し、彼の地の研究者の知遇を得ながら、近時のドイツにおける「生の現象学」と宗教哲学との融合の試み、およびそうした試みの道徳哲学的な含意について、有意義な意見交換を行うことができた。

最後の2011年度においては、上に記した「自己覚触」の時間的構造への問いを具体的に展開するため、まずは、「生命の自己触発性」の時間的構造を丹念に分析したM. アンリの論考を積極的に参照しつつ、上述の問題をめぐるハイデガー哲学の批判的な読解可能性の検討に、努力することにした。その探究の成果が、下記の「5. 主な発表論文等」欄の3番目の〔学会発表〕として挙げた論考である。実存の *Lastcharakter* としてハイデガーが表現した事態を、ここでは、*advent-character of life* として再解釈することを通じて、「現実性」という様相概念の生成論的な意味を新たに時間的に捉え返すための準備がなされた。そして、この *advent-character of life* という概念によって、本研究は、われわれ各人の生の時間的な自己理解から生じる「ニヒリズム」を超克するための理路の解明という中心的課題に応答するための核心的構想を準備することができた。

ここで問題化された事態を、人間存在の共同性の場面において捉え返そうとしたのが、下記〔学会発表〕欄の2番目に掲げた比較倫理的論考であり、これによって、非カント的な道徳形而上学の基礎づけを旨とした本研究の最終課題に、現段階で可能な範囲において応えることが試みられた。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者に

は下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

・古荘真敬「形而上学の根源をめぐって—ハイデガールのプラトン解釈の一側面—」、『理想』、理想社、査読なし、第686号、2011年、125-137頁

〔学会発表〕(計3件)

・古荘真敬「実存と時間」、哲学会第47回研究発表大会、2009年10月31日、東京大学(東京都)

・古荘真敬「ひとりあること／共にあること—和辻とハイデガーをめぐる試論—」、哲学会第50回研究発表大会、2011年12月3日、東京大学(東京都)

・Masataka FURUSHO(古荘真敬)“Being Aware of One's Own Life”、The 6th BESETO Conference of Philosophy、2012年1月8日、東京大学(東京都)

〔図書〕(計1件)

・松永澄夫、浅田淳一、古荘真敬他、東信堂、『自己』(叢書「哲学への誘(いざな)い—新しい形を求めて」第V巻)、2010年、総284頁、(「呼びかけられる私、呼びかける私—「自己」の由来と行方について—(170-206頁)を分担執筆)

〔産業財産権〕

○出願状況(計 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

○取得状況(計◇件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年月日:

国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

東京大学・大学院総合文化研究科・准教授
研究者番号: 20346571

(2)研究分担者
()

研究者番号:

(3)連携研究者
()

研究者番号:

6. 研究組織

(1)研究代表者

古荘真敬 (FURUSHO Masataka)